

2017 ARTA DIGITAL Rd.2 FUJI 500km

KEEP ON RUNNING FORWARD

「ただ、前進あるのみ」

ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI

Project

ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI
Project



5月の富士は、山頂部に冠雪を残し悠々たる勇姿を見せている。その麓で始まる500kmの長丁場を、五月晴れの空が出迎えている。

GT500クラスを戦う8号車ARTA NSX-GTは、予選こそ久々のGT500フルアタックに戸惑った小林崇志が満足のいく走りができず8番手に留まったが、Q1では野尻智紀が5番手のタイムを出してみせたように、マシンのポテンシャルは上位に匹敵するものがある。



Santana Thava

8



Mobil 1

BRIDGESTONE

Mobil 1

BRIDGESTONE

ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI
Project

GT300 クラスの 55 号車 ARTA BMW M6 GT3 も、富士での経験が浅いション・ウォーキンショーの攻撃で9番手となったが、こちらも真の実力はもっと上だ。その実力を発揮し、巧みな戦略で長丁場を上手く戦えば、上位を狙うことも充分にできる。そんな期待を秘めて、いざスタートに臨んだ。55号車のスタートドライバーを務める高木真一を、エグゼクティブアドバイザーの土屋圭市が焦ることはないと落ち着かせる。

高木「7号車の方が加速が良いな……ちょっとこれじゃ抜けないよ」

土屋「焦らなくて良いよ、焦らなくて。距離が長いんだから大丈夫」





野尻がステアリングを握る 8 号車は、4 台の集団による 8 位争いの中に挟まれて苦戦を強いられている。コカ・コーラコーナーでやや飛び出したり、最終コーナーでギリギリのバトルを演じる場面も見られた。

そんな中で9周目、高木が叫び声を上げた。
高木「ポルシェ(33号車)がぶつけてきたよ〜! 最悪!」
安藤「クルマは大丈夫ですか?」
エンジニアの安藤博之が慌てて状況を確認する。
2台後方にいた33号車がブレーキングで止まりきれず、前にいた高木のマシンに追突してきたのだ。高木はすぐにマシンのフィーリングに違和感を感じ取っていた。
高木「少し喰らっちゃった。レースはまだ始まったばかりなのによお〜! 左側ぶつけられたからね。あ、全然ダメだ、これ……。100Rが全然曲がらなくなった。トーが狂ってるね、左コーナーがすごくオーバー」
ぶつけられた怒りはあるが、相手がわざとぶつけたわけではないことも分かっている。



高木「クッソ、ふざけやがって…！
なんであんなことすんだよ……。
藤井（誠暢）は良い人なのに、前
の峰尾（恭輔）のクルマ（9号車）
が速いから焦っちゃったんだろ
うね……」

しかし、決勝直前にさらにセット
アップ変更を加えて絶好調だった
はずのBMW M6 GT3は、かなり暴
れ馬のようなフィーリングになっ
てしまった。高木は必死にドライ
ビングでそれをなだめすかしなが
ら走っていた。

高木「右コーナーはまだ良いけど、
左はすっげえオーバー。
ヤバイ！1コーナーのブレーキン
グでもすごくオーバーになってる」
安藤「了解、ショーンに伝えてお
きます」



高木「2速でブレーキングしながら曲がるとオーバー。
今は1速を使ってる。クルマはスゲェ良かったのに……」
土屋「真一、アライメント狂ってる割にはそこそこの
タイム出てるじゃん」
高木「ブレーキを使わないように走る感じなんで、シヨーン
にはツライかもしれない。トラクションがないから慎重に
アクセル踏まないとセクター3は結構ツライ。
アクセルワークに気をつけて欲しいね」

一方、8号車は混戦の中でライバルとの位置関係を見ながらピットストップのタイミングを考えていた。エンジニアの星学文が野尻に伝える。星「目標は30周でいきます。後ろのリアルが入りそうだから、プッシュして。ウチはリアルが入った次の周に入るから」



野尻「了解」

星「リアルが入った。ここプッシュでお願い！」

27周目にピットに飛び込み、走行中に少し浮き上がってしまったボンネットの修理もしながら、小林にドライバーチェンジ。

500kmの長丁場はまだ1/3を過ぎたところでしかない。

ピットでじっと見守る鈴木亜久里総監督に代わって、エンジニアの星が小林に檄を飛ばす。



AUTOBACS
ES AGURI

Project

msc

BRIDGESTONE

ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI
Project



星「前の車に絶対追いついて行けよ！」

小林「今（タイヤに）ピックアップしてるから、それを取るから待つて」

星「了解。前の車は1分31秒台真ん中で走ってるよ」

小林のペースは一進一退。

1点でも多くポイント獲得を狙う小林だったが、なかなか順位を上げられずに苦戦していた。

星「残り15周。頑張ろう」

小林「燃料が軽くなってマシンバランスは良くなってきた」

星「じゃあペースを上げていこう」

小林「基本的なバランスはオーバーステアでリアがロックしたりしてるから、野尻が乗ってたときよりブレーキバランスを前に持ってってるんで、言っておいて」

A close-up, low-angle shot of a BMW steering wheel. The BMW roundel logo is prominently displayed in the center of the wheel. The background is dark and out of focus, showing the interior of a race car with various colored lights (red, blue, orange) and parts of a racing helmet.

一方、55号車は37周目にピットインをして高木から
ショーにドライバー交代を行なうが、給油機に問題が
発生し、その影響でメカニックの作業にもミスが出てし
まう。これが原因で痛恨のドライブスルーペナルティを
科されてしまった。

「ショー、君のミスじゃないけどピットスルーをしな
ければならなくなった。この周に入ってきてくれ」



super AUTOBACS
ニッポンを元気に!

AUTOBACS

carrozzeria

COMTEC

Castrol EDGE

WORK

BRIDGESTONE

Ikebukuro BMW

COMTEC

Castrol EDGE

WORK

BRIDGESTONE

ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI
Project

安藤「ピックアップに気をつける。君のペースは良いよ」

土屋「ション、全然速いじゃんよ！」

トップと同等のペースで周回するションに、土屋も思わず声が出た。



しかし、給油機のトラブルで想定通りの燃料が入っていなかったことが分かり、もう一度ピットインしなければならなくなってしまった。

安藤「戦略変更だ。3周後にピットインして給油だけする。タイヤ交換、ドライバーチェンジはしないよ、給油だけだ。ピット前に停止してエンジンを切って待ってくれ」

ション「Copy that」



67 周目、8 号車の小林がピットに入ってきた。野尻にドライバーチェンジし、最後のステイントへと出て行く。何ポイント獲ることができるか、ここが踏ん張りどころだ。

星「野尻、最後まで長いけど頑張っていこう。ペース良いよ、前とのギャップ 10 秒」

野尻のペースは良く、毎周星がカウントする前とのギャップはじわじわと縮まっていく。

星「ギャップ 7.5 秒、セクター 1 は野尻がベストで走ってるよ。頑張ろう」



しかし残り周回数がなくなる前に追い付くことはできず、9位のままでチェッカーダフラッグ。上位勢は全てトヨタLC500勢が占めるという圧倒的な展開で苦しいレースを強いられたが、それでも総距離500km、110周もの距離を走ってトップと同一周回でフィニッシュし、2ポイントを手にした意味は決して小さくない。



そして 55 号車は 77 周目に都合 4 度目のピットインを行ない、高木に最後のステントを委ねた。

高木「100R とかのバランスは悪くないんだけど、セクター 3 はドオーバーだね。ブレーキングではクルマが横向くし」

安藤「残りあと約 20 周です」

高木は「こんなクルマの状態で抜けるかな？」と言いながらも

「抜けちゃったよ！」とジワジワと順位を上げていき、

17 位までポジションアップ。

しかし入賞圏まで追い上げるだけの周回数は残されてはいなかった。





Sammy

LAP 10 TIME

25.2269



FLAG FINISH

安藤「お疲れ様でした。ポジション 17 です」
土屋「お疲れさん。真一、今日は珍しくタイムのばらつきが大きかったね」
高木「周回遅れなんで譲っただけですよ」
そう、いったん周回遅れになってしまうと、上位勢に譲らなければならなくなる。
高木の本来の仕事ができるようなポジションではなかったのだ。

「クルマもドライバーも速かっただけに凄く悔しいね。今回は運がなかったね」
土屋もそう語るしかなかった。しかし、結果にこそ表われはしなかったが、富士での M6 GT3 の速さは確認できた。このデータを元に、8 月の富士ではさらに速さを磨いてリベンジができるはずだ。





8号車もあと一步の速さが足りない。それは亜久里総監督もよく分かっていた。

「ペース自体はそれほど悪くは無かったけど、全体的なレベルがまだ低いね。トラブル無く最後まで走りきってポイントを獲得出来たのは良かったけど、もっとレベルアップして、次のレースはもう少し上のポジションでレース展開出来るようにしたいね。そうすれば表彰台も見えてくるので、次のオートポリスまでには改善したいね」



結果はともかく、自分たちの今の実力は分かった。これをどこまで磨くことができるか。第3戦オートポリスはわずか2週間後にやってくる。勝利を目指したいのなら、敗北に打ちひしがれ立ち止まっている暇などないのだ。



ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI
Project



ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI

Project

ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI
Project



株式会社オートバックスセブン



ARTA Project



ARTA DIGITAL
You tube チャンネル

To Be continued next race...



©2017 ZEROBORDER INC. All rights reserved. No reproduction or republication

Director and Photographer : Masakazu MIYATA

Text : Mineoki Yoneya

Design : Hiroaki KATAYAMA

Special Thanks : AUTOBACS SEVEN CO., LTD